

朝鮮通信使と江戸御馳走役

―宝暦度の事例―

町田 一 仁

はじめに

朝鮮通信使の使行時における海陸御馳走役による応接・饗応については、各地に遺されている御馳走記録の調査研究が進み、その実態が解明されつつある。また、江戸城で行われた各儀式や饗応、登城行列、客館での文化交流などについての論考もある。しかしながら、使行の目的地であり、長期にわたって滞在した江戸客館での通信使の動向、江戸御馳走役（江戸館伴）による応接等の実態については、論考に乏しく未解明な部分が多い。本稿は、長府藩が御馳走役を務めた宝暦度の事例を分析し、その具体的な内容、並びに藩政への影響について明らかにするものである。

利用した史料は次のとおりである。

(1) 「朝鮮国信使饗応記」(山口県文書館所蔵「豊浦藩旧記」第十九冊)

(2) 「朝鮮信使事」(毛利家所蔵・山口県文書館寄託「毛利家文庫」御勤事第二十七冊)

(3) 「宝暦信使記録 館伴より来候御留書 二冊の内 毛利能登守様衆」(慶応義塾大学所蔵『宗家記録』第四十一冊)

一 長府藩と朝鮮通信使

長府藩は毛利秀元を藩祖とする長州支藩の一つ。関ヶ原後、長府(下関市長府)に拠点を置き、長門国豊浦郡など三万六千二〇〇石余を領有した。長州藩における西の押えとしての役割を担った。のちに公称高は四万七千八〇〇石

余となり、天明三年（一七八三）には幕府から一〇代藩主毛利匡芳が五万石の城主格として列せられた。五代藩主に後嗣なく一時的に断絶したこともあったが、藩祖の秀元を含め一四代の藩主が続き、廢藩置県を迎えた。なお、明治二年から同四年までは豊浦藩と称した。

長府藩は朝鮮通信使の使行時には、下関（赤間関）において本藩の萩藩とともに応接にあたり、主に港湾及び陸上の警固、下行を毎回担当した。

例えば、「長門下之関御馳走一番」〔通航一覽〕卷之五十四・朝鮮国部三十と激賞された正徳の使行においては、藩士二七六人、足輕・中間三〇五人、船頭一〇人、舸子五〇〇人の合計一千五一人の人員（萩藩は三千四七八人）、関船三、小関船七、荷船五、鯨船九、小船一二二、網碇船二の合計一四八艘（萩藩は六五五艘）の船舶を動員した。下行は、往復で一三日分となり膨大なものであった。

また、延享の使行においては、八代藩主毛利匡敬（のちの萩藩七代重就）が駿河吉原宿の休息所（昼休）での御馳走役を幕府から命じられた。御馳走後の年末、長府藩では財政難に陥り、藩士に初めて御馳走米を課すこととなり、これを一〇年近くにわたって徴している。

東海道ノ中路ニ供帳スルノ故ニ耗費尤モ甚シク、藩中

近年迄御馳走米銀ヲ課セラレシ事、実ニ此役ニ由ルト云
〔史料(1)〕

その額は、高式百石以上は四歩上り、高百石ヨリ百九拾石迄は三步上り、高九拾石以下は式歩上りであった。

二 長府藩、江戸御馳走役を命じられる

宝暦度の江戸御馳走役は、大洲藩主加藤遠江守泰武（六万石）と長府藩主毛利匡満（五万石）の二人が務めた。匡満への幕府からの任命は、宝暦一二年（一七六二）三月一日であった。

三月朔日、毛利能登守様江朝鮮人東本願寺客館御馳走役被仰付、加藤遠江守殿被仰合可被成御勤旨之蒙仰、御退出直様此御方江御出御知せ被成候、且、於赤間関先格之通下行遊之儀、従殿様御使者被遣候〔史料(2)〕

当日は本藩の萩藩主毛利重就に対しても「長門国赤間関、周防国上関於両所御馳走之儀」が命じられており、重就は匡満に対して従来通り下関（赤間関）での御馳走を指示した。しかしながら、江戸御馳走役の大任であり、人員及び

費用が膨大なものとなることから、以後、長府藩家老から再三にわたって、次のような申立てが萩藩当役に行われた。

於宿坊御馳走御役被仰付、過分之人数差出候儀二御座候故、赤間関御馳走御手伝之儀、無扨御断申上候

〔史料(2)〕

萩藩も負担が増すことから容易に譲歩しなかったが、最終的に長府藩の下関での「御馳走御手伝」については、通信船の来着時及び帰帆時の火消し役の提供を除き免除された。これにより、長府藩では江戸御馳走役に専念することができた。一方、萩藩は長府藩負担分の人員を下関に派遣したが、上関派遣の人員が不足したことから、岩国領吉川氏の上関での「御馳走御手伝」の負担が増す結果となった。

萩藩主重就は匡満の父にあたり、長府藩の八代藩主であった人物である。自身も長府藩主時代の延享五年（一七四八）、駿河吉原宿での通信使御馳走役を命じられた際、その人員と財源を確保するため、萩藩から要請された下関での「御馳走御手伝」を断っており、その辺りの事情もあつたと推測される。双方がやりとりした書中に「延享之趣茂有之」・「延享五年信使之節茂」〔史料(2)〕などの文言が頻出する。

長府藩が支藩でありながら延享度、宝暦度と連続して通信使御馳走を幕府から命じられた理由は、長府藩の廃絶・再興、長府藩の再興に伴い廃絶した長府分家の清末藩（一万石、下関市清末）の再興が背景にあるものと思われる。再興後の長府藩は通信使御馳走のほか、勅使饗応役などの様々な幕府御用を課せられている。また、宝暦九年（一七五九）七月二八日から同一四年（一七六四）二月四日の間、清末藩主毛利政苗が外様の支藩主でありながら、幕府要職の奏者番兼寺社奉行を務めており、寺社奉行として通信使御用にも関与していたことから、宝暦度の江戸御馳走役任命は、その影響もあつたものと推測される。

三 江戸御馳走人の役割

江戸御馳走役は、江戸の客館において通信使の警固、衣食住に関わる日常的な世話、外出時の乗物提供や先導・警固、来着時及び帰国時の饗応、登城行列時の先導・警固などを行った。

主に一〇万石以下の譜代大名二名が任免されることが多いうのであったが、宝暦度の大洲藩と長府藩は外様であった。通信使の江戸滞在期間は、宝暦度で宝暦一四年（一七六四）二月一六日から三月一日までの二五日間で、先遣

の献上馬護送の三人を含めると、二月二日から御馳走の開
始となり、その日数は三九日間の長期に及ぶ。

通信使の江戸客館は天和度までは馬喰町の本誓寺であつ
たが、天和二年（一六八二）一月に焼失したことから、
正徳度からは浅草の東本願寺となり、享保、延享、宝暦の
四度にわたって、幕府はここを客館とした。

1	使行年	西暦	江戸御馳走役	
			不明	不明
2	元和3年	1617	(京都聘礼)	
3	寛永元年	1624	安藤右京進	不明
4	寛永13年	1636	安藤右京進重長	脇坂淡路守安元
5	寛永20年	1643	岡部内膳正	加藤出羽守
6	明暦元年	1655	岡部美濃守宣勝	加藤出羽守泰興
7	天和2年	1682	小笠原長勝	内藤左京亮義泰
8	正徳元年	1711	酒井修理大夫	真田伊豆守
9	享保4年	1719	牧野駿河守	中川内膳正
10	延享5年	1748	戸沢上総介	伊東修理大夫
11	宝暦14年	1764	加藤遠江守泰武	毛利能登守匡満
12	文化8年	1811	(対馬聘礼)	

『通航一覧』から抄出

別表に各使行時の江戸御馳走役を記す。

四 宝暦度の朝鮮通信使

最後の江戸使行となった宝暦度の朝鮮通信使は、正使の
趙曠以下四八〇人前後の人員で使行した。そのうち、通信
使船の維持・補修のため大坂に留まった者を除く三六〇人
余が目的地である江戸に入った。随員には、この使行の紀
行文である「日東壯遊歌」を著わした金仁謙（従事官付書
記）がいた。

※長府藩の記録（史料①）では、先遣の三人を含め「江
戸ニ来ル者三百六十五人、大坂ニ留ル者百拾四人」と
あり、総人員を四七九人としている。ただし、往路の
死亡者二人、発病による送還者六人が除外されている
かは不明。

この使行も苦難続きで、往路の対馬において釜山で負傷
していた卜船将一人が死亡、対馬で発病した六人の重病者
を送還した。また、筑前相ノ島では副使船が大破し航行不
能となり、大坂では一人が病死した。帰路の大坂では「崖
天宗殺害事件」が起きている。

なお、この使行で正使趙曠は、救荒作物とするためサツ
マイモを朝鮮に持ち帰っている。

五 江戸御馳走の準備

宝暦度の通信使は、宝暦一四年（＝明和元年、一七六四）一月八日に將軍献上の鷹が江戸に到着、二月二日に將軍献上の馬五疋が次官（理馬）・中官（小通詞）・下官（使令）の先遣隊三人とともに客館の東本願寺に到着している。献上馬は「御馬并藝馬」（史料(1)）とあるから、曲馬を含んでいた。献上馬は東本願寺の厩において、將軍献上の日まで長府藩と大洲藩で世話をし、曲馬は馬上才のリハーサルと本番、上野での射芸に利用された。先遣の三人は、本隊到着の二月一六日までは東本願寺には入らず、近くの蓮光寺を宿所とした。

長府藩では大松寺を藩主の宿坊とし、家老、手廻、目付は清光寺、留守居、御用方、祐筆は梅光院、番頭と触役は超徳院、御供横目は智徳院、諸士は善照寺と本法寺、細工人、足軽・中間も本法寺、雇足軽及び御用方の残りが大仙寺に宿泊するなど、八ヶ寺に分宿した。大洲藩は崇福寺と真福寺を宿坊とした。

家老の田代大学以下百数十人の藩士、二百人近い足軽・中間を動員し、「火の番」として火消し一一人、掃除・提燈持などの人足、輿や駕籠などの乗物を昇く陸尺を数百人

を雇入れた。加えて、八〇疋の乗馬、一三疋の中馬を用意した。

また、火災時の避難場所（「火事之時朝鮮人立退場」（史料(3)））として、築地本願寺、西久保天徳寺、本郷本妙寺、駒込吉祥寺を充てた。

献上馬が到着した二月二日から通信使御馳走は開始され、家老以下三九人の藩士、足軽・中間八六六人、厩之者五人が早朝から東本願寺に罷出て、寺内外の警固、「馬之番」、先遣した随員の応接などを行った。

本隊が客館に到着した二月一六日からは本格的に御馳走が開始されることとなり、三月一日の通信使の江戸出発まで続いた。藩主巨満は通信使到着の前日に長府藩江戸屋敷から浅草に居所を移した。また、客館の警固についても両藩で綿密に打ち合わされ、東本願寺の東側を大洲藩、西側を長府藩が担当した。このことは徹底され、大門、中門、通路などの各所に設置された番所も東側を大洲藩、西側を長府藩が担当し、警固する人員の格、数は同様とされた。

なお、江戸滞在中の通信使に対する下行は、幕府が直接担当した。

六 通信使御馳走の内容

客館滞在中の通信使の動向と行事、これに対する具体的な御馳走内容について、使行直後に記録され、長府藩から対馬藩に提出された〔史料(3)〕により日毎にまとめると、註1のとおりとなる。これを内容別に整理すると、次のように分けられる。

- ① 昼夜にわたる客館内外の警固。
- ② 来着時及び帰国時の藩主による三使の送迎。
- ③ 来着饗応及び帰国饗応。
- ④ 音物の呈上(初、中、饒別の三度)。
- ⑤ 登城行列時の先導・警固、乗物及び諸道具提供。
国書伝命のための登城行列は、通信使とすれば使行の最終目的を達する行動となる。また、將軍からすれば通信使が登城する様子を数十万の江戸町民に見せつけて、「將軍一代の盛儀」を演出することから、通信使来日の最大のハイライトとなった。そのため、御馳走役にとっても「ハレ」の日である。当日の長府藩の先導・警固の様子について、註2に掲載する。
- ⑥ 献上馬の管理、曲馬・射芸の練習及び本番時の先導・警固、乗物及び諸道具提供。

⑦ 三使の対馬藩江戸屋敷訪問時の先導・警固、乗物及び諸道具提供。

⑧ 外出時の乗物提供、先導・警固(以酌庵長老も含む)。

三使の外出は、登城時と宗対馬守江戸屋敷の訪問時だけであるが、上々官や上判事などは供を連れて頻繁に外出している。また、以酌庵長老については、伴僧を連れ、ほとんど毎日外出している。

⑨ 將軍への礼単及び朝鮮国王への進物の持ち運びと管理。

⑩ 幕府上使の応接。

⑪ 「懸り老中」ほか幕府役人への報告。

このほか、連日客館に押し寄せる多数の学者たちの取り次ぎなどもあったと推察されるが、連日のように来訪している林大学頭父子さえ記録されてはおらず、来訪者については、幕府上使及び幕府役人についての記事があるだけである。

通信使の客館内での様子、客館を訪れた学者との学術交流などについては、趙曠「海槎日記」、成大中「日本録」、金仁謙「日東壯遊歌」が参考となる。

また、御馳走役二人の格付けは、六万石の大洲藩加藤氏が上席となり、客館東側の警固、登城行列時の左側警固、外出時の先乗は大洲藩が担当し、客館西側警固、登城行列時の右側警固、外出時の跡乗を長府藩が担当した。

まとめ

江戸滞在中の通信使の動向、江戸御馳走役の具体的な応接等について見てきたが、そのなかで注目されることは、通信使随員の頻繁な外出である。

三使をはじめ通信使の全員が外出する機会は、江戸到着時と出発時を除いて、国書伝命時の江戸城登城、対馬藩江戸屋敷訪問の二回で、この時は通信使行列を編成しての道行となる。それ以外では一八回の外出を数え、外出人数は延べ一三五人にのぼる。公式行事となる江戸城での曲馬(馬上才)、上野での射芸、これらの行事の準備のための外出もあるが、上々官や上判事などが再三にわたって供を従えて、対馬藩江戸屋敷を訪問している。また、帰国が近づくため幕府老中へのあいさつ廻り、御三家、幕閣への音物配りのための外出が多くなる。

頻繁な外出は、通信使にとって日本の国情探索の絶好の機会であり、また、江戸町民などにとっては、たびたび通信使を見物することができたということである。その結果、両者の間に様々な交流が生まれ、江戸やその近郷の祭礼における唐人行列のように、通信使がもたらした文化的な影響が色濃く遺ることとなった。

宝暦度の江戸御馳走役の通信使応接は、藩主の三使への対応、客館の警固、火災予防、進物の管理など、実にきめ細やかで懇切丁寧であった様子が窺える。また、通信使随員や以酌庵長老の外出は連日であったが、乗物の提供、警固などに相当の人員を割いてこれに対処し、外出先でのトラブルの発生を未然に防いでいる。

朝鮮通信使の江戸御馳走は、結果的にこの回で最後となり、以後、幕府と朝鮮王朝の直接的な交渉は途絶えることとなった。

長府藩は、下関(赤間関)での「御馳走御手伝」がありながらも、延享度の駿河吉原宿での海陸御馳走役に続いて、江戸御馳走役を命じられている。二度とも「御馳走御手伝」については、萩藩の格別の配慮で軽減されているとはいえず、御馳走役の財政負担は大きく、二度とも財政難に陥っている。延享度では藩士に御馳走米を約一〇年間課して財政難を脱したが、宝暦度の江戸御馳走役は長期にわたるうえ、動員する藩士、雇い入れる足軽・人足なども多人数となったことから、「夥敷御物入」(史料(1))となった。そのため、今度は領民に対して朝鮮人御用銀を課すとともに、下関の豪商一人から銀五三〇貫を借用して、江戸御馳走役の大任を果たした。

長府藩では毎度のことであることから、赤間関における

通信使の饗応記録を作成していないが、今回については「前役（延享度）ハ通信使ノ往来ニ供スル者ニシテ、其事軽シト為ス故ニ、今其重キ者ヲ挙テ後役（宝暦度）ノ事ヲ記ス」〔史料(1)〕として、はじめて饗応記録を作成した。

（まちだ かずと 下関市立考古博物館長）

註1

「宝暦通信使記録 館伴より来候御留書 二冊の内 毛利能登守様衆」（慶応義塾大学所蔵『宗家記録』第四十一冊）

※〔通〕は通信使一行、〔以〕は以酌庵長老、〔馳〕は御馳走役の長府藩の動静それぞれを示す。

〔二月二日〕

〔通〕 九ツ半時、先遣の曲馬と護送の朝鮮人が到着。馬五疋と次官（理馬）、中官（小通詞）、下官（使令）の三人。馬は本願寺の厩に入れられ、朝鮮人は三使到着まで蓮光寺を宿所とする。

〔馳〕 朝六ツ時まで本願寺に家老以下藩士四四人、足軽・中間など八六人が罷出、本願寺の警固、馬の世話、先遣の朝鮮人への接待がはじまる。

〔二月一日〕

〔通〕 將軍などへの献上品が入った荷物五一個（封印付き）が長持三五棹に入れられ、本願寺に到着。

〔馳〕 藩士七人、足軽・中間一五人で荷物請取・立会。

本日から藩士四人、足軽六人で献上品の不寝番。

〔二月五日〕

〔通〕 通信使一行が品川に宿泊。

〔馳〕 毛利匡満が江戸藩邸を四ツ時に発して、本願寺の宿坊に入る。加藤氏とともに本堂から厩に至るまで巡見。駒田太郎左衛門を使者として品川に派遣。また、客館内外の番所の設営や装飾、調度品の準備などが完了。

〔二月六日〕

〔通〕 通信使一行が品川を出発し、日本橋、浅草橋、駒形堂の道筋で客館の本願寺に到着。三使は未中刻に到着。

〔馳〕 毛利匡満と加藤泰武は、大紋を着用して本堂の対客所縁通で三使を出迎え二揖。三使から下官までの居間の諸道具を長府藩が提供。両藩主が宗対馬守と対面。

〔馳〕 中官・下官に対して、五五三膳で来着饗応。両藩各々、座敷奉行五人、配膳・給仕三〇人、手長三〇人で接待。

また、以酌庵の膳長老及び芳長老、伴僧、通詞に對しても饗応。

〔二月七日〕

〔通〕 上々官一人が宗対馬守を訪問。

〔馳〕 大洲藩が供廻り、諸道具を提供、長府藩からは跡

乗一名を付ける。

〔以〕 瞻長老・伴僧が寺社奉行松平和泉守邸を訪問。

〔馳〕 乗物一挺、昇人四人、傘持一人を提供。

〔二月八日〕

〔馳〕 三使、上々官、上官、小童に対して来着饗応。

御馳走役兩人、饗応規式等を見分。兩藩各々奉行八人、配膳及び手長等五〇人で接待。

〔通〕 饗応後、三使は寺社奉行松平和泉守、大目付大井伊勢守、勘定奉行一色安芸守、御馳走役兩藩主と対面。兩藩主は大紋を着用し、対客所で人參湯を提供して挨拶。

〔通〕 三使、幕府上使の老中松平右近將監武元、松平右京大夫輝高と対面。

〔馳〕 上使に饗応。饗応後、兩藩主が懸り老中ほか幕府役人、宗対馬守に報告。

〔通〕 上々官一人が老中廻り。小童一人、使令一人を伴う。

〔馳〕 乗物、乗馬、昇人八人、徒士三人、足軽七人、長柄傘持人二人、釣台持二人、提燈持九人、雨具挟箱一を提供。

徒士目付は兩藩各一人、先乗は大洲藩、跡乗は長府藩から一人。

〔以〕 瞻長老が伴僧と江戸城へ登城。

〔馳〕 物を提供し陸尺六人、先箱持二人、茶・弁当持一

人、中間七人、案内足軽二人、伴僧乗物三挺、昇

人二人。以後、兩長老外出時については、瞻長老は長府藩、芳長老は大洲藩が担当する。

〔以〕 瞻長老が伴僧と宗対馬守を訪問。

〔馳〕 乗物等は例の如く提供。

〔二月九日〕

〔通〕 上々官一人が外出。

〔馳〕 供廻り等は大洲藩が提供。長府藩は跡乗一人を付ける。

〔馳〕 三使、上々官へ音物。槍重一組（包熨斗添）。今

回の使行は禁酒のため酒はなし。宗対馬守、対馬藩家老二人、同裁判役、同出馬役、同通詞下知役にも音物。宗氏へ二種箱、家老へ一種千疋、宰判役・出馬役へ一種五百疋、通詞下知役へ二百疋迄一〇人（此通詞下知役ハ九世話多キモノ）。

〔二月十日〕

〔通〕 宗対馬守江戸屋敷で曲馬下乗のため、上判事一人、馬上才二人、理馬一人、小童一人が外出。搬送した曲馬は三疋。

〔馳〕 上判事から小童まで乗馬六疋で移動。警固と曲馬搬送のため、馬番の徒士、厩小頭、足軽、沓籠持、長柄傘持など二七人を付ける。長府藩の厩小頭を除き兩藩で等分提供。

夜、神田多町で出火のため、客館内外を嚴重に警

固。

【二月二日】

〔通〕前日に引き続き曲馬下乗。上々官一人、上判事二人、理馬一人、小童三人、使令三人、官人六人の計一六人が宗対馬守江戸屋敷を訪問。

〔馳〕乗馬二疋、徒士目付四人、徒士二人、足軽三人、長柄傘持人二人、杏籠持人二人、雨具釣台持人四人、迎えの高提燈持二人。両藩から提供。上々官供廻り及び先乗物頭一名は大洲藩、跡乗物頭一名は長府藩。

〔以〕瞻長老、伴僧二人と外出。

〔馳〕足軽、乗物昇、先箱持、笠籠持、釣台昇など二人を付ける。

【二月三日】

〔以〕瞻長老、伴僧と外出。

〔馳〕乗物昇、雨具持五人を付ける。

【二月四日】

〔通〕上々官一人、小童二人、通詞一人、使令二人の六人が宗対馬守江戸屋敷を訪問。

〔馳〕乗物一挺、乗馬三疋、徒士三人、足軽九人、昇人八人、雨具持二人、長柄傘持四人、杏籠持三人、釣台持二人を提供。

先乗物頭は大洲藩、跡乗物頭は長府藩、徒士目付は両藩から各一人。

【二月五日】

〔通〕上々官二人、使令四人が外出。

〔馳〕大洲藩が乗物、人員を提供。長府藩から跡乗物頭一人と徒士目付一人を付ける。

〔以〕瞻長老、伴僧と外出。

〔馳〕「駕之者等、例之通差出之」。

〔馳〕毛利匡満、加藤泰武を招いて酒肴。御供衆へ茶菓子。

【二月六日】

〔以〕以酌庵長老と伴僧が外出。

〔馳〕「乗物・昇人・付人等、如例差出之」

〔馳〕將軍献上物を江戸城に搬送。長持一〇、白木台一八。長府藩中丸与三を物頭とし、徒士目付一人、下座見一人、先払・跡押の足軽三五人、長持持は両藩から各三〇人、白木台持は各三六人、その他、雨具釣台持一〇人、高提燈持六人、箱提燈持二人。

【二月七日】

〔通〕三使登城。朝鮮国王の国書伝命。

〔馳〕両藩主は登城行列に先立ち登城。

両藩ともに藩士、足軽・中間、人足を総動員して本願寺内外、宿坊の警固、本願寺門前での馬割を行うとともに、長府藩からは藩士六〇人、足軽一〇〇人以上が通信使行列右側の先導や警固にあた

り、その他に大旗綱控、口付、沓籠持、雨具持、挟箱持、長柄傘持、昇人などの中間・人足一三〇人以上が諸道具持などで加わる（大洲藩は行列左側の先導・警固などを行う）。また、帰館時には長府藩から提燈持一八五人も提供。

〔馳〕諸行事終了を懸り老中ほか幕府役人に届出、宗氏へ御欲使者。また、加藤氏へ賀使。加藤氏からも賀使。

〔二月二八日〕

〔通〕上々官一人、上判事一人、小童二人、小通詞二人、使令二人が宗対馬守を訪問。

〔馳〕人馬、乗物を「例之通」提供。跡乗として物頭一人。

〔以〕瞻長老と伴僧二人が外出。

〔馳〕乗物、昇人を「例之通」提供。

〔二月二九日〕

〔以〕瞻長老と伴僧一人が外出。

〔馳〕乗物、昇人を「例之通」提供。

〔三月一日〕

〔通〕吹上御所で曲馬の上覧。上々官三人、軍官三人、小童三人、馬上才二人、理馬一人、中官四人の計一六人が曲馬二疋を伴い登城。

〔馳〕乗物三挺、乗馬一三疋、昇人二四人、徒士七人、足軽四六人の他、長柄傘持、雨具持、挟箱持、沓

籠持、雨具、釣台持、合羽籠持などを両藩から提供。先乗は大洲藩、跡乗は長府藩。迎提燈持二六人。

〔馳〕三使、上々官へ二度目の音物。三使に白柿一箱と鮮鯛（双尾）一折、上々官へ白柿一箱と石決明一折。

〔三月二日〕

〔馳〕毛利匡満、宗対馬守の仲介で朝鮮人書画を見る。

〔三月三日〕

〔通〕御三家への音物配りのため、上々官二人、上判事二人、小童一人、官人六人、小通詞一人、計一二人が外出。

〔馳〕乗物、人馬、諸道具持、長持昇人などを「例之通」、両藩が提供。先乗は大洲藩、跡乗は長府藩

〔以〕瞻長老と役僧一人が寺社奉行訪問。

〔馳〕乗物、付人を提供。

〔三月四日〕

〔通〕老中板倉佐渡守、若年寄井伊掃部頭、同松平肥後守、松平讃岐守、酒井雅楽守への音物配りのため、上々官二人、官人一五人が二手に分かれて外出。

〔馳〕乗物、人馬、諸道具持、長持昇人などを「例之通」、両藩が提供。二手のため、先乗二人を大洲藩、跡乗二名を長府藩が出す。音物は長持七棹。

〔通〕三使から御馳走役兩名に進物。各々に「人参壺、

白苧布 参匹、色紙 参束、扇子 式拾柄、黄毛筆 式拾柄、魚皮 伍張、房栢子 陸拾顆」と進物目録。
〔馳〕進物は宗対馬守の使者から両藩御用人に渡される。
留守居役が長袴着用にて三使に御礼。また、宗氏へも御礼の使者。

〔以〕瞻長老と役僧一人が外出。

〔馳〕乗物、付人を提供。

〔三月五日〕

〔通〕三使を宗対馬守が招請。午上刻に出館、西中刻に帰館。瞻長老及び伴僧も同行。

〔馳〕通信使行列を組んでの訪問のため、登城行列時に近い乗物、人馬を両藩が提供。三使及び宗対馬守に使者口上。

帰館時に両藩主が三使を出迎え。また、懸り老中ほか幕府役人に使者をもつて帰館報告。

〔三月六日〕

〔通〕上野で軍官と馬上才が射芸を披露。上判事一人、

軍官七人、馬上才二人、小童三人、小通詞三人。

〔馳〕人馬を両藩から提供。先乗は大洲藩、跡乗は長府

藩各一人。

〔通〕上々官一人が宗対馬守を訪問。

〔馳〕乗物、付人などを提供。

〔通〕上々官一人外出。

〔馳〕乗物、付人を提供。先乗、跡乗。

〔馳〕朝鮮国への「御返物」、三使以下官人への「被下物」

を江戸城で請取り、本願寺まで運ぶ。留守居役以下、藩士三人、徒士五人、足軽五三人、持夫三〇〇人、釣台持四〇人、合羽籠持二四人を提供。細引・桐油・油紙・太竹など持参して運搬。

本願寺本堂では家老、番頭、用人、目付、物頭、各一人、徒士五人及び足軽二〇人で進物の確認・整理。以後、給人二人、徒士二人、足軽五人を両藩から差出し不寝番。

〔以〕瞻長老と伴僧一人外出。

〔馳〕乗物、昇人「如例」提供。

〔三月七日〕

〔通〕三使、来寺した幕府上使から將軍返書及び進物目録を託される。

〔馳〕両藩主、大紋を着用して幕府上使を出迎え。

〔通〕上々官二人、上判事一人、小童三人、小通詞二人、

使令六人が老中に御礼廻動。

〔馳〕乗物、人馬など「例之通」提供。先乗、跡乗。

〔通〕上判事一人、中官二人、使令二人、宗対馬守を訪問。

〔馳〕徒士目付を両藩から各一人、人馬を長府藩が提供。

〔以〕瞻長老、寺社奉行を訪問。

〔馳〕乗物、昇人、付人「例之通」提供。

〔以〕長老使僧一人、外出。

〔馳〕乗物、昇人、平人一人「如例」提供。

〔馳〕宗対馬守衆と兩藩主で朝鮮人進物配り。長持七棒の持人、釣台七の持人、合羽籠持一四人、足軽七人、提燈持を提供。

【三月八日】

〔通〕上判事一人、官人四人が宗対馬守を訪問。

〔馳〕徒士目付を兩藩各一人、人馬は大洲藩が提供。

〔馳〕「御返物」荷拵え。兩藩下役人、足軽・中間が宗対馬守衆の指示で一〇日まで行う。

【三月九日】

〔通〕上々官が幕府老中方を訪問。

〔馳〕乗物、昇人、付人を提供。

〔通〕上々官一人、中官一人が老中訪問。

〔馳〕先乗、跡乗。乗物、付人「如例」提供。

〔以〕瞻長老と伴僧が登城。

〔馳〕乗物、昇人、付人「如例」提供。

〔馳〕三使、上々官、上官、小童に対して帰国饗応を行う。人員配置は来着饗応時と同じ。藩主二人は颯斗目半袴で出堂。

懸り老中ほか幕府役人に饗応終了を届出。両長老及び伴僧、通詞下知役は饗応を辞退、代わりに下行銀を渡す。

〔馳〕三使に餞別。毛利匡満が三使、上々官に餞別を贈る。三使には綿百把（白木台に五〇把宛二包を積

む）、上々官には白銀三〇枚（包熨斗）。

【三月一〇日】

〔以〕瞻長老が老中廻り。長老使僧二人が外出。

〔馳〕乗物、昇人、付人「例之通」提供。

〔馳〕将軍から通信使へ下される銀子が対馬藩家老衆から届く。

銀子は百枚入りが四〇箱、四〇枚入りが一箱。兩藩の留守居役が請取。翌日の出立前に上々官に渡す。

〔馳〕通信使出立に先立ち、兩藩主が宗対馬守を訪ねて謝意を表す。

【三月一日】

〔通〕通信使帰国のため江戸出立。三使は九ツ時に出立。

〔馳〕朝、中官、下官に対して帰国饗応。人員配置は来着饗応時と同じ。出立前に品川へ留守居役を派遣し、品川御馳走役に出立を報告。兩藩主は大紋を着用し、玄関上り口で見送り。警固は来着時と同じ。出立後、兩藩主は登城し、老中・若年寄ほか御馳走役終了を報告。帰館後、毛利匡満が加藤泰武を訪ねて暇乞い。

通信使出立後、火用心のため入念に各居間を点検。番人を付置。

曲馬二疋、宗対馬守屋敷へ引き渡す。

【三月一九日】

〔馳〕御馳走所（本願寺）を引渡し、これを幕府役人に届出。また、幕府諸役人に挨拶し進物。

〔三月二八日〕

〔馳〕毛利匡満、登城して將軍に謁見し、御馳走役終了を報告するとともに、帰国の暇乞いをする。

註2

「宝曆信使記録 館伴より来候御留書 二冊の内 毛利能登守様衆」二月二十七日の条（慶応義塾大学所蔵『宗家記録』第四十一冊）

同二十七日

一 今日三使登城二付、左之通

一本願寺大門内外固、来着之節之通

一同所門前馬割役、右同断

一能登守宿坊前固、右同断

一下馬馬割役

熨斗目麻上下

番頭 大久保孫五郎左衛門

同断

物頭 横弥五兵衛

同断

給人五人

右、何茂騎馬

服紗麻上下

徒士目付式人

同断

徒士三人

かんはん羽織袴

足軽四拾七人

内、小頭式人

長杖

右之通、此方より差出之、遠江守様分も御同様

一能登守衣冠太刀帶之、三使より先達て登城、留守居駒

田太郎左衛門能登守より先達て罷登候

一所々遠見之者

本願寺出立 浅草御門 常盤橋

右之場所え双方より足軽壹人充付置、御玄関双方留守

居罷出候場所え注進候

一 国書台同輪台、先達て御城え被差越対馬守様御役人附

添被参候付、双方より徒士壹人充持人式人充差出之

一 国書輪玄関迄出入、昇人來着之節之通、双方より差出

一 三使登城行列

服紗麻上下

半町程先立 徒士目付壹人

一先騎馬拾騎

熨斗目麻上下股立取

番頭 上田権左衛門

右同断

庄原半左衛門

物頭 内藤孫三

尾崎市三郎

右同断

小笠原三郎兵衛

佐々木幾三郎

平土 井上三郎兵衛

西熊之丞

内藤孫助

品川茂十郎

一中馬拾三疋 但、御賄方より出候

内、老疋 肌背

内、拾式疋 鞍置

但、鞍皆具・口付・沓籠付人・足輕共ニ双方より

半分充差出

一大旗綱控 中間六人

一国書轡附 給人三人

但、一方より昇人遠江守様より被差出

熨斗目麻上下

中村七郎左衛門

瀧川佐次兵衛

桂新平

一三使轡昇、不残雨具・挟箱・宰料共、從遠江守様被

差出

一正使轡附 給人五人 但、一方分

熨斗目麻上下

栗屋又右衛門

村井三太夫

吉田六郎左衛門

田上八郎左衛門

入江官兵衛

一副使轡附 給人五人 但、一方より

熨斗目麻上下

小山清五郎

石井小左衛門

磯谷善次左衛門

井上弥左衛門

林平藏

一從事轡附 給人五人 但、一方より

熨斗目麻上下

野村惣左衛門

福原吉五郎

財満長次郎

中川右中

西小膳

一上々官乗物三挺并昇人三拾六人、雨具・挟箱三・長

柄傘三本・裁判徒士三人共二、右不残此方より差出之

一上々官三人附 給人六人 但、一方老人二式人充

熨斗目麻上下

伊秩伊平太

鵜飼八右衛門

工藤牧太郎

槇庄兵衛

兼井佐太郎

佐伯吉右衛門

一製造官乗物付人等、遠江守様より被差出

一良医乗物付人等、右同断

一長柄檜拾本

かんはん羽織袴

長柄之者式拾人 手代り在

麻上下

同小頭老人

かんはん羽織袴

押足軽拾五人

麻上下

足軽小頭老人

一朝鮮人雨具入篋釣台拾六

宰料足軽拾人

一同勢雨具籠式拾四荷

一跡騎馬五騎

熨斗目麻上下股立取

番頭 桂助左衛門

右同断

物頭 中川清左衛門

右同断

沼田小八郎

内藤亘

国弘十左衛門

一押騎馬老騎

右同断

物頭 田坂伝三郎

右之通、能登守方より右之方差出、從遠江守様左之

方被差出之

一両長老登城二付、瞻長老之方此方より差出乗物昇人付

人等、如例

一朝鮮人迎提燈、此方より左之通差出

高提燈持八拾五人

箱提燈持百人

一三使帰館以後、御悦且安否為尋能登守於対客所上々官

を以申達候